

1 調査概要及び成果等

○ 課題

「インドにおける消防・救急・救助行政の現況調査」

○ 受入先

Manav Rachna International University

実施期間

2016年8月31日－2016年9月16日

○ 目的

インドにおける消防・救急行政における現況を調査し、報告する。また、主に食環境に焦点を当てて調査することで、今後の研究活動や調査内容の参考にすることを目的とした。

○ 概要

受入れ先大学である Manav Rachna International University において、調査内容の主旨および内容について説明し、担当教授から理解を得て、インタビュー調査等の調整をお願いした。受入先大学は、栄養学部を備えており、調査には、栄養学部教授および修士学生の同行を得た。消防・救急行政職員はヒンディー語話者であったため、調査に行く前に調査内容を説明し、ヒンディー語に翻訳してもらいながら調査を行った。調査内容については、インタビュー調査・活動量調査・心理状態調査の三点を行った。インタビュー調査において、各行政機関の概要、勤務体系、食事の摂取状況について二機関で調査を実施した。活動量調査においては、消防隊員に対し、活動量計を用いて活動量調査を実施した。同時に食事調査の実施を依頼したが、勤務中の写真等の許可が下りず、断念した。心理状態調査としては、専用の調査用紙を用いて、救急隊員に対して、勤務中の待機中の心理状態と、通報を受けてから現場に向かうまでの心理状態の2つの場面についてどのように心理状態が動くかを調査した。



(調査中現場に出動する救急車)



(インタビューの様子)

○ 成果

インドでは、消防・救急・救助と日本における消防本部という一行政が担う職務を三機関が分担して行っており、本調査では、消防と救急に対してインタビュー調査等を実施した。なお、救助を担う機関においても調査を依頼したが、現地での交渉が叶わず、調査は実現しなかった。

【消防行政】

デリーには消防活動拠点が59か所あり、その一つである南部地区の消防署のDirectorにインタビュー調査を行うことができた。勤務は二交替で行われ、24時間勤務を行っている。管轄内および近隣地区からの出動要請については無料に対応し、遠方からの要請には有料に対応可能であるとの回答を得た。宿舎および居住地域が決められている。食堂が併設されているが、機能はしておらず、隊員たちは持参もしくは、購入して食事をしていた。また、活動量調査を消防隊員2人について実施した。隊員間の活動量に差はあまりないという回答を得ている。3日間の調査結果、1日の総消費カロリーの平均は1621±13kcalであった。午前7時付近と午後4時付近に活動量が増加することが見られた。調査対象は、日中勤務を行うDirectorであり、調査を行った日は災害がない日であった。調査結果から、災害の発生がない日にあつては、一般の人に比べても活動量が少なく、勤務中も活動はほぼないことが分かった。食事調査を実施することを希望したが叶わなかったため、確かな数値は得られないが、災害がない通常勤務時は、一般的な食事で補える量の活動量であることが分かった。

【救急行政】

救急については、デリーの南部地区を管轄とする基地でインタビュー調査をすることができた。勤務は三交替で行われ、12時間勤務を行っている。朝から夕方まで勤務する班と夕方から翌朝まで勤務する班に分かれている。職種は、AAO (Assistant Ambulance Officer) Paramedic, Driverの三種類に分かれている。女性の職員も雇用していた。出動要請については、すべて無料で行っている。宿舎はなく、食事も持参もしくは、購入するという方法を取っていた。勤務時間が12時間であるため、食事に関してはあまり問題を感じていないとの回答も得た。

救急本部では、心理状態の調査を救急隊員4名 (Paramedic 2名、Driver 2名) に対し実施した。Driver 2名は、通常勤務における待機時の心理状態としては、落ち着いた状態から、通報を受けてから現場に向かう際の心理状態として覚醒状態にベクトルが伸びていた。また、Paramedicに関しては、1名はDriverと同様の方向 (落ち着きから覚醒)、もう1名は逆に (覚醒から落ち着き) ベクトルが伸びているという結果がみられ、2名に共通して心理状態の動きは少なかった。Driverに関しては、出場中救急車の運転を行うため、通報を受けてから現場に向かう際、心理的にも覚醒される一方で、Paramedicは出場中も気分を落ち着けている状態や、多少の覚醒を見せるなど、現場到着後に備えていたり、心理状態に違いが見られ、これについては、勤務年数の影響もあるのではないかと考察した。

以上のように、インドにおける消防・救急行政の現況について知ることができた。渡航前から現地大学および教授と調整を重ねていたが、インドにおける公的機関へのアプローチの困難さを実感した。消防行政においては、消防署に入る許可が下りず、近隣の飲食店でのインタビューとなり、写真等の撮影許可も得られなかった。現地で調査内容について説明したところ、当初本調査には、6カ月は時間を要するとの回答を得たが、受入先大学の教授の多大な尽力により、2週間という短い期間で、2つの行政機関の職員にインタビューを行い、活動量調査および心理状態調査を実施することができた。

○ 調査を終えて

実際に調査を行った感想としては、インドの首都であるデリーの有事対応行政は調査以前に想像していた以上に充実しているということである。消防・救急・救助とそれぞれに特化した行政機関が配置されていた。それぞれ車両や資機材も充実しており、管轄内については無料で対応していた。消防・救急いずれも活動拠点多く、有事の際に迅速に対応する体制は確立されつつあるように感じた。交通量が非常に多く、道路には、車やオートと呼ばれる三輪のバイクタクシー、二輪バイク、自転車、歩行者、場所によっては牛などの動物が溢れており、最も多い災害の一つに交通事故を挙げていた。17日間生活していた大学においても、滞在中にスクールバスと学生の乗るバイクが衝突し、2名の死者を出す事故が発生した。デリーはインドの首都であり、急速に発展を続けている。インタビュー調査から、今後の災害に対する被害想定や対策はされていないという現状を知ることができた。日本の首都である東京同様、今後は、災害に対する予見、対策が必要であるようにも感じた。

食事の面については、インドでは、スナックと呼ばれる夕方取るティータイムが一般的にあり、これは、日本でいう3時のおやつに相当するものであると考えられるが、職務中であってもスナックを摂る習慣があることが分かった。「食べる」ということをとても大切にしている国であると感じた。大学の栄養学部の授業の中で、産業の発達や技術の革新に伴う労働環境の改善・発達により肥満が社会問題化しているという内容があり、インドにおいても日本同様の問題が起きていることに気付いた。しかし、調査に向かうタクシーの窓からは、電気もないテントのような中で暮らす人々、トタン屋根のようなもので覆った一角で生活する人々を目にし、富裕層と貧困層の格差を感じた滞在でもあった。しかし、政府としても無償で消防・救急サービスを提供するなど、国民にとっての必要性を感じていることが分かった。消防や救急等の機関においても、今後は補給車や持ち出して食べるようなパッケージ食等の検討も進められているという話を聞くことができ、今後は大規模災害発生時の予測・対応等についても検討していく必要性について考えようとしていることが分かった。

本調査において、受入先大学の教授・学生に大きな理解を得て、想像以上に円滑に調査を進めることができた。先入観を捨てて、飛び込んでいくことの重要性、自分の興味関心について気持ちを込めて伝えれば、言葉や文化の差異を超えて応えてくれるということを感じた経験となった。ヒンディー語話者に対して英語話者を介してインタビューをするという貴重な経験もできた。自身の語学力については更に向上していく必要性を感じた。また、渡航中、香辛料等による体への影響を日々感じる中で、



(民族衣装サリーを着て先生たちと)

災害時ライフラインがストップした中で、体を温めたり、発汗により冷却したりする機能を持つ成分の災害時の食事への活用という新しいアイデアを得ることもできた。また、災害等を主題として話をする中で、対人という面では、世界の国々の争いが絶えないが、自然災害に面するときは世界の人々が手を取りあうことが可能なのではないかと感じた。ますます国際化をたどる社会を生きていく中で、本調査の成果は、今後の調査研究に生かしていくことができると感じた。また、人生においても貴重な経験となった。最後に、渡航に際し、ご協力いただいたすべての方々に感謝申し上げます。